記念誌「相中相高八十年」より
（創立期 その 12）

寄宿舎（明治～大正～昭和５年）

本校舎新築工事は 1898（明治 31）年暮れから槌音も高くはじまり、木造総平屋建て、木の香も新しい校舎で授業が開始されたのは、1899 年 4 月 17 日であった。

更に、木造平屋建て 2 棟 16 室の寄宿舎も建築され、1902（明治 35）年 2 月 25 日に最初の舎生百余名が入舎した。寮舎は「図南寮」と名付けられた。

舎生が誇るべき自主性を堅持しつつ、雄図を抱いたひとりひとりの胸に、数々の思い出を刻んでくれた「図南寮」は、舎生の減少のため、1930（昭和５）年３月末をもって閉舎した。

「当時、県内には県立の中学校が数校だけであったので、南は双葉郡、西は伊達郡その他から入学してきた。他郡の人たちは勿論のこと、原町や鹿島あたりの人たちの多くは、寄宿舎に入舎した」

（第 7 回卒 渡辺宗重 (註1)）

「1912（明治 45）年から、舎内の照明が、ホヤを毎日念入りに掃除しても仄暗いうえ石油臭が強く鼻をつく『洋燈』から、当時にあっては将に真昼を欺くような明るさと思えた『電燈』に変わった。」

（第 26 回卒 草野宗光 (註2)）

「…さて、何から何まで風変わりな生活だった、5 時 30 分起床、直ちに掃除、洗面、6 時点呼、7 時まで学習、7 時朝食、8 時登校、一校時毎に自室に帰って、時間割に合わせた教科書やノートを持っていく。12 時昼食、午後は 5 時夕食、6 時半門限、7 時半まで学習、7 時 40 分学習再開、8 時 40 分学習終了、点呼、9 時消灯、就寝。

夏も冬も変りのないこの日課は、すべてラッパの合図で終始する。ラッパは当時の軍隊の吹き方と同じだったから、あの恨めしいような起床ラッパ、悲しいような消灯ラッパ、うきうきとした食事のラッパなどが、少年達を悲しませたり喜ばせたりしていたのである。冬の 5 時半起床はきつかった。まだ真っ暗である。水で雑巾がけをするとあとから真っ白に凍る。雑巾がつるつるすべる。5 年生の掃除掛りの検査もきびしいが、そうでなくともその中で隣室と廊下の艶を張り合ったものである。……

上級生と下級生の区別はやかましかった。上級生を呼ぶときは誰々さんと呼ぶ。同級生か下級生でなければ誰々君とは呼べない。特に 4 年生と 5 年生はえらかった。兵隊の位でいえば将校で、1 年生と 2 年生は兵卒だった。3 年生は下士官みたいなものだった。起床ラッパが鳴る。兵卒は飛び起きて自分の寝具を片付け掃除と洗面を済ませたら点呼に早からず遅からざるようしかもご機嫌を損じないようにやんわりと将校を起こし申し上げるのである。もしも点呼に遅れて、わが敬愛する直属の将校が舎監にとがめられでもしたらどんな反響が兵卒の頭上に振りかかってくるかわからない。食事ラッパが鳴る。兵卒は飛ぶように食堂に先行し味噌汁の実をたっぷりとよそって将校の着席をお待ちする。……学習するにも遊ぶにも友だちに不足するということはない。結構愉快なものだった。（南北寮の対抗試合などがしょっちゅうあった）

……

だが、また寄宿舎は病菌の巣窟でもあった。各室が回り番で作る献立は質素を旨とし、結局栄養不足となり、あたら青年の結核でたおれるものが、ばったばったとあいついだ。せっかく憧れの第四高等学校に合格し、桜に白線の帽子を枕元に置きながら死んでいった友達もいた。

インキンも猖獗をきわめた。これは入浴で伝染するということだった。みんなやられた。股をひろげてよちよち歩く格好は何ともぶざまだった。恥ずかしがったりしてはいられない。ヨードチンキを塗って友達にあおいでもらうのである。その痛さは障子の格子など見えたものではない。

……

学期に一回、夜の会食があった。これを夜会と称した。食堂を幔幕や大国旗で飾り、舎監のほかに校長や学校の宿直の先生まで招待した。日ごろとはうって変わって、生菓子、乾菓子、果物に鳥肉御飯と盛り沢山のごちそうを並べて、夜遅くまで歌い興じた。千葉先生の詩吟、富田先生の尺八など見事なものだった。半谷豊さんのマンドリンなどもよかった。また年に一回は松川浦の舟遊びをやった。大湖船だの、ベニスの舟歌だの、浦一ぱいに響いた。中州にはゆらゆらと白煙が上がり「大鍋や松にかけたるあさり汁」が待っていた。もちろん往復とも歩くのだが疲れたりはしなかった。

（第 27 回卒 佐藤高俊 (註3)）

食　堂

舎　室

合図のラッパ

入　浴

（註１）中村出身

（註２）上真野出身

（註３）石神出身（相馬高校教諭 昭和 30 年 4 月～43 年 3 月）

（7 月 31 日 転記＆文責 村山）